



學

語

全

津田文庫

文庫 1

1718





冢田多門述



# 學子語

雄風館藏

つ 仁文庫



學子語

初問

塚田多門 虎述



客來て問て曰拙者幼年よりは予く家督に  
 承りて勤向とて親乃介抱とに暇なく勿論武藝  
 少くは嗜み作場も恥とて少くも南年とて  
 屋捨集の解とて尋も學問もとて終大學一冊讀  
 りも作の事唯今不承て忘後悔致とてに作場も  
 忘らぬとて少くも實小六乃至多指公とて今日より學  
 初も少くも用とて少くも作の何卒由指南不承り友

學子語

全

撰者室

010190609281



なるを分るし世のやく同書の素淡より初の作也何を  
 ねらげなきなりぬき唯学問の道理とましく得  
 作振るぬ淋もく度う其大意とら諭して事ごとく  
 存しん

言て曰ふも此書よそは学問の大意とら即只今  
 信せむと知の由まの初句は法親の由介抱きた  
 忠孝と書る海成中よりそ家國天下と治家道を  
 学ぬゆも作之聖人乃由言ふ朝は道とて夕は死をも  
 可也と度く人と生れて死を候まて人の人さ道理も

1713

知るありて果はひふも口惜きもの作ははそと極老よ  
 むりそと書かざりし命とてそ朝は初て道と由  
 作ても一日よりそ人乃由知と存ぬは會熟り  
 そまの詩とゆれ人の終ふて死一作はも國ぬい務  
 るゆん人やはと老衰もむし人半六十の歳を  
 学い初めゆもはまも作はも中入り  
 しそ母なれ今日よりはやと書かむと又文武並道  
 車乃由輪のゆくかしく離れて計りしゆ中作て文事ゆ  
 者必武の備あり武事あり者必文の備ありと聖人も

學語

三

一

五



のまひ既々今川了俊の仲秋に割譲すも文道と知れし  
 武臣は勝利と得た家ゆきも習子も存心あり明  
 又まゝ武術の何程訓練せし文道と知れはま  
 武藝とやそのまゝ武道と申すもより作をせ  
 細れば従来武藝は嗜みながらその文道の學  
 べれば武臣乃々得もいふにならぬれは文武忠孝  
 と嗜む禮義と正しくまゝ習ふにわらう武家乃々定  
 法令とてしを作ぬれ

同て曰唯今の忠言も附て忠告も少く疑あるの作あり

孝は能く今日世の中は勤方たに致し致し  
 孝より忠誠をまの請は免るべきなり  
 世の中は身成しは學問いふは文字と讀ん人  
 忠孝とはがみその源方宮さまも作り又學問いふは  
 りもかく文盲の如く人として文も忠も孝といふ  
 終るは家も作らぬ是らまをそん人これ生質の心  
 不正世とふよりそめは學問やこれ人終るは  
 中も何れもいふと成るは



言て曰らむのつ不實の惟一も一神と云存かむと云の  
 ことには非されしはせむと云乃君不忠義と云一親  
 孝と能まむと云ハもさしつのはより誰人か初め  
 云らむ世の中不忠孝仁義と云名目よりたはる家  
 日なり神代よりあたまさし一名目とて作らむ又天竺の  
 佛法より名目とて作らず唐も日中も天地の家  
 々一時代のふ代と親子兄弟の禮義も似く男女夫婦の  
 差別も似く尊卑も似く是れもさしつる人あてたはる  
 かの中義乃古<sup>ミヤコ</sup>堯舜<sup>ミヤコ</sup>なる人より聖徳の帝乃世と治の

ありし時より今も親ははらむと孝といふより兄弟  
 はらむと悌といふと始とて忠信仁義等の終りの名目  
 としけらむと倫五常の道といふと教はらむより人  
 と尊卑のもさしつる人あてたはる夏殷周の三代と  
 して聖人教とて治めらむ世乃武千年好も漢より  
 海にの忠孝仁義なる人の名目漸くは海乃外を  
 及び天下の政道も皆聖人の道とせしめて違はるる人  
 人倫も常れらむ世は成りしに今の世も人  
 生れらむは成りしに親子兄弟夫婦の差別とて



親ははらふと孝といひし君はつゆわが誠忠といふと仁は  
 仁義ならんとの名目とも竟るに実ふ日月と光と被る同  
 しく天下の人竟るを知らざる聖人の徳といふは世に  
 ある波より舟に依れば舟は舟向せざる人も舟のつら  
 孝に義は名目と知て親ははらふ君ははらふに等し  
 りしと作られざるも唯孝と忠孝といふ名のみ竟るて忠孝  
 の名理と學ぶぬ人其忠と孝とを別するはならず不孝  
 とは家といひ孝といふは孝といふは孝といふは孝とい  
 いて忠孝の心より致せしむるを却て孝君父と不義不

道ふ處へ入り者る古より多くを考へて孔子の  
 忠孝子子路は至て正色して人をして信じしが孔子は問てい  
 りて古の道をたゞて家存る家のすにのみを以て  
 せんやといひされ孔子は言て曰くむし東夷乃人小  
 中國の礼を女子乃再嫁せぬといふを以てて其姫の  
 少くして寡婦といふに似たり夫内訌聲と入垂て婚姻乃  
 禮と謂て其嫁せざるは是再び嫁せぬといふは嫁したる  
 むに何れもはれざるは我にあらざるは又むし  
 蒼梧嬖とて人其を以ててに美女なりければ其妻は



兄は譲りてはくし一とんは譲りてはゆつしははまら  
 ざれどもゆれども非禮の譲りては初めを悔まざりて後  
 悔ももせぬゆなり今汝古の道とをせむと汝なるは  
 悔に事とゆらんよとくは是れゆなりと非禮の  
 るゆと是るゆと譲りては譲りては譲りては譲りては譲り  
 何ゆもまの譲りゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 玉極れとてゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 了るゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 又市和ももゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

切ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 國家の用とゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 忠孝のゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 君父のゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 同て回を極ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 是後一ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 是ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 若しゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ



昔て曰さればそむりては後世多くは學問の道と云ふ  
 作て儒者學者とすそのも或は教の及ばざるを  
 しく書籍と云ふは釋令續りんと辯言よく教へ作  
 ありて職を以てのみは又そむりて學問の道と  
 する文字と覺る書物と讀む詩文章なりと作を  
 學問とすそ作の及ばざるの學問の道と云ふに  
 けりそとてそを理屈と論もはりて今日南を  
 才のひふりては作て忠孝仁義の是非と云ふと  
 志はすといふはに物知り息は成りて世活と傳り  
 輕人なり

そと人教万巻の書籍と讀む數千年乃古事と讀  
 是と云ふ乃學者とすそのも作らず論語と事と  
 傳りて言ふ  
 傳み有道と知て正とと學と好むといふはそ  
 忠信乃才よりそと懈怠なく敏疾なりといふ  
 とは傳りて言ふはそと道と存なり人なり  
 傳りて言ふはそと道と存なり人なり  
 正して貫くんとすはと學と好む者なり又日  
 ちの所と知り月を能く知るとはそと學問  
 好むといふはそと目くに眼及びて家の一  
 日の朝



此の心と云ふは思ふて忠孝仁義の道は於て失ひしるもの  
 ありしと云ふ所を思ひて終つてまじつ月の申の家の心  
 と考へてを能くするものと能くせざるものと云ふは  
 目く思ふべきは此の心得失と者<sup>つひ</sup>と云ふは  
 心と云ふは此の心得失と者<sup>つひ</sup>と云ふは  
 学者と云ふは此の心得失と者<sup>つひ</sup>と云ふは  
 聖人孔子の心と云ふは此の心得失と者<sup>つひ</sup>と云ふは

此の心と云ふは思ふて忠孝仁義の道は於て失ひしるもの  
 ありしと云ふ所を思ひて終つてまじつ月の申の家の心  
 と考へてを能くするものと能くせざるものと云ふは  
 目く思ふべきは此の心得失と者<sup>つひ</sup>と云ふは  
 心と云ふは此の心得失と者<sup>つひ</sup>と云ふは  
 学者と云ふは此の心得失と者<sup>つひ</sup>と云ふは  
 聖人孔子の心と云ふは此の心得失と者<sup>つひ</sup>と云ふは

讀書

此の心と云ふは思ふて忠孝仁義の道は於て失ひしるもの  
 ありしと云ふ所を思ひて終つてまじつ月の申の家の心  
 と考へてを能くするものと能くせざるものと云ふは  
 目く思ふべきは此の心得失と者<sup>つひ</sup>と云ふは  
 心と云ふは此の心得失と者<sup>つひ</sup>と云ふは  
 学者と云ふは此の心得失と者<sup>つひ</sup>と云ふは  
 聖人孔子の心と云ふは此の心得失と者<sup>つひ</sup>と云ふは



知るの教之禮經ハ貴賤上下親疎同和を分ち明ふして  
 君臣父子兄弟夫婦の別と云うて人と素くく敬けいまざる  
 の教之樂經ハ人乃音聲を以て其容貌を動く此の節々  
 と修めて人倫の交を和順せしめんと廣く易やまくふすの  
 教之易經ハ盛衰進退の事ことを辨わけ疑うはす時を天地自然の  
 理と極たぎるて改かげせしめ物と潔いんく精けいくす此の教之春秋經  
 ハ古之乃君臣乃存亡得失と證あしめてと辭ことばと法りようとを事こと次  
 ばひづるの教之されどもけ六經の中ハ禮と樂との二經周の  
 末より春秋の始をよむすその間ハ皆散失して傳つたへずむ

漢の世よりして迄の學者よりれ古き記録なるは  
 さうめん取集めて禮記といふものと撰あみまよりして易と  
 書經詩經春秋とに禮記と並べると又經と号して讀之  
 又孔子の教と記せし孝經論語家語は作つくははけ三書  
 とは必ずしも讀よむべきものとせしむ

同て曰ある世の中ハ學者の抄法より學問をせはすし  
 け書小學近思錄も作つくらるし一ひと只今迄せむるは  
 六經を以て八遠の作つくらるる也  
 是を以て曰われ世の書目ハ皆古より學問より作つくらるる有ある世



ほかびて宋の世は成りて程子と朱子の存ありて禮記  
 四十九篇の中より大學と中庸との二篇と抜り編語  
 孟子の書と一經ありて四書といふ名目と附けられ  
 今四書は朱子乃集注と改まりそのと世は四書と稱  
 作之小學と朱子の存ありて經傳の中より幼學なる  
 者の心得もいふこととと書けて作れりそのと又  
 近思錄も朱子の見識とて心性の理なり其とと書  
 たりといふ

同て曰十三經二十史といふの書物といふ人乃

作らるゝものなり

言て曰十三經もハ易と毛詩と尚書と春秋左氏傳と禮  
 記と周禮と儀禮と孝經論語と春秋乃ハ年傳と穀梁傳  
 と爾雅と孟子と十三經といふはれども十三經も名目  
 ハ唐の世ハ孔穎達といふ人といふやとせしむるに  
 今依名目といふ二十史もハ史記と漢書と後漢書より  
 五代史もすて乃世に此記録と十七史といふは宋遼金元  
 の正史といふ二十史といふは二十史の類とすて歴史  
 録といふ歴史といふ略といふ見たりハ歴史廣鑑或は通志



又ハ通鑑つがんなりヤ書しよのことなりク

同て曰又またなりヤハ在國史漢ざいこくしわんトハ一ひとなるものなり記書きしよ也  
のことなりヤハ在國史漢ざいこくしわんトハ一ひとなるものなり記書きしよ也

言て曰在氏傳國語史記漢書ざいしつでんこくごしきわんしよのことなりヤハ一ひとなるものなり記書きしよ也  
乃春秋なうしゆんてうトハ一ひとなるものなりヤハ一ひとなるものなり記書きしよ也  
賢人けんじん乃世よなりヤハ一ひとなるものなり記書きしよ也  
國くにと分ちて世よなりヤハ一ひとなるものなり記書きしよ也  
國語こくごト春秋しゆんてう外傳がいでんトハ一ひとなるものなり記書きしよ也  
にて伏羲神農ふぎしんぬの時ときより漢わんの五代目武帝ごだいめいぶていの時ときまで

すて乃事誨ことわいと名く取集とくしゆのて記録きこくなりヤハ一ひとなるものなり記書きしよ也  
後漢ごわん乃班固はんこトハ一ひとなるものなり記書きしよ也  
十三代目平帝じゅうさんだいめいへいの後ごハ王莽わうまうトハ一ひとなるものなり記書きしよ也  
漢わんの言こと祖その起りより漢わんの  
又後漢書ごわんしよトハ一ひとなるものなり記書きしよ也  
光武帝くわうぶていの起りより十四代目獻帝けんていの起りまで乃後漢ごわん  
一代乃事實いちだいなりじじつと記録きこくなりヤハ一ひとなるものなり記書きしよ也  
海うみなりヤハ一ひとなるものなり記書きしよ也  
申まをなりヤハ一ひとなるものなり記書きしよ也



却て易き振覚く史記漢書などの史類とは  
 ありき振覚く史記漢書などにむづの書物  
 書経詩経易春秋など六韜のゆりて論語など  
 一は解かた記書ありて漢魏以来世々乃学者乃  
 経解難しれども今も明く釋き得くものもた  
 ぶゆきとゆと論語などとは初学のゆの振覚  
 ありて在困史漢など讀むとむづしん学問の振覚  
 ち皆道なきすき友のゆなきゆ  
 同て曰はくは学問のゆとありて在る経傳歴史  
 史

皆誘ひばなりぬゆも

言て曰は振覚作美学問ゆとの約れを身一ひの  
 忠孝と換ふるゆ作は論語を初とせとく漢代  
 ち之理と合得しゆゆは学者とせゆゆのゆも  
 増れん天子と治道と作ゆ天地のるるゆゆ  
 ち之理と知るゆゆは経傳歴史の類六韜のゆ  
 諸子百家もして老子列子庄子墨子など諸子の書  
 又一家くれ見識と著りゆ百家の書乃漢魏書  
 ちんごに列子ゆ書物も皆読ぶるゆゆゆ和書とせ







讀初の序へきや

昔て曰天下の事は國ありて國の事は家ありて家の事は身ありて身の事は父母ありて父母の事は孝と教との次第を得べきことなるを孝經と讀きて教の初の本と爲す道の始と孝の初なりといふことありて是れは孝經の初なりといふに似たり漢の世より以來歴代乃天子諸侯より平人より至るまで讀書の初めは必しも孝經より始るとおもふこと日本よりても昔より

天子乃湯讀書初めを孝經とて作すこれに孝經と讀初として次は論語家語と讀きて孔子の教とて之を學ぶに次は五經と讀へきことなり五經の中にも堯舜三代の聖帝明王乃道を尚書とて作すは尚書次學問の神とて爲りて熟讀して次は詩經易春秋礼記と讀きて又より漸く周禮儀禮なども讀へきことなり次に左傳國語は詩の經義を助るの書と作すは二書は必しも之を讀べきことなり

同て曰當時世の子能らざるの素讀して作さるるは大學より讀初めを四書小学と讀むはより今



修せぬく書物乃次第と相違ふ作らぬ也

言て曰大学より漢初の事も何より漢初の作ても

始終字句の志づくに懈怠なくお精しく作り讀書

の次第は何事もしも苦くお痛づく作らぬも右や海

内書小学からぞく作らぬ宋の程子朱子よりお宋の

作て唐の世より宋の漢の世より宋の讀書の次第ハ

何事にも孝經論語家語と次第いづゝとのおんや

さすれば後の世のおまゝよりおまゝ古よりれ學問

次第とちり作て孝經より漢初の孝經の心得と學問

のおんや作孔子の言も難いやとて存

回て曰せしとて論語孟子と並べ作のうた今

論語家語と次第をてハ孟子とは後かともて海

して作や

言て曰孟子は並ぬとて荀子もそのような作

周の末戦國の時とて聖人の道衰へて終に邪説

起りて世俗を惑ひし時とて孔子乃て教を興へ

一家の儒學と述一人と孟子荀子の其人は

めては經書と漢し次より孟子荀子の二書と漢



予のえんをふくむ人乃書と聖人乃經書と並ぶるを  
 ほどの貴と書と惟りて人これ好む好むより漢の  
 世より朱子と好む荀子と好む人ありて漢の  
 漢の揚雄唐の韓退之なりて好む朱子と好む人ありて漢の  
 程子朱子と好む又格別朱子と尊信して終に編纂と  
 並ぶる程は好む是を乃る予ハ漸く經義と熟し堯舜  
 たる孔子と好むすて此聖人の教と能く會得たりは  
 予是流らむれりて予の心なり

學子源

問て曰右の經書の學問と予の心源孔子より初り  
 たる也又孔子より此系も學問と予の心源なり  
 答て曰學問と予ハ堯舜の法より初りて予の心源なり  
 時代より系く此世の聖賢の言行と學問を作すゆめ  
 尚書乃二典と漢中も此の法なり堯舜の道も此  
 予の心源なり此の法なり堯舜の道も此の法なり  
 殷の湯王周乃文王武王と此二代の聖王と予の心源なり  
 此の法なり堯舜の道も此の法なり堯舜の道も此の法なり  
 道と學問は予の心源なり



其家とせし夫子告せし言よまゝに人々を聞と  
 求めしこれ事と違つ古訓は學ばざるも權も  
 あり事し古人の道と作とせざるも世と承  
 せしものなり競あつぐ知るはあつなり是般の  
 知れし事

問て曰孔子より此系の學問もやほり後世の  
 六經の書と學びしもの作や又と別ふ書籍ありて  
 學びしものなり

子曰孔子より此系の三墳六典八索九丘と書籍の  
 ことを作ししは伏羲神農黃帝の三皇の書と三墳  
 とは少昊顓頊高辛と堯舜禹の六帝の書と六典  
 とは八卦の義理を説く書と八索といふ天下九州の  
 間の土地風俗を物なるもの指しと書と九丘と  
 といふは地理の事孔子より古くは書籍の事  
 申めて見しは知れし事とん屋すく知れし事と  
 指し考へしは詩書易禮樂春秋の六經の定め  
 所を堯舜より以来の世に及ぶまでの道とあり



辨酌せぬれく教と達らぬくふらぬく  
 同て曰修せのぬりふ作りて竟舞よりひ家も至人より  
 多くて作れと孔子いすて何ゆえよ竟舞よりひ家のこ  
 ほうりと取のひくそひ家乃道とは用ひよりぬくまふ  
 作や

答て曰凡と古の至人乃天と治の至りに正徳と利用  
 と厚生との二徳とすその作て才一正徳とすハと才  
 なる人より人偏る至人の徳と二つて天と志をくく  
 美民とて又子兄弟夫婦の乃と二つてせむとひく

才の utilization とすハ耒耜と作りて耕作乃用と便利や  
 斧鑿と作りて飲食乃用と便利や 罽毼織機乃  
 具と造りて衣服の用と便利やせむの類とひく  
 才三厚生とすハ美民とて徳くあ達くさう志む  
 才南とてそ平よりハ鳥とさせ七平よりハ朝文肉と  
 喰せ民の生と厚くすはとひく之類に天地の宜く  
 みざるもの上古の世ハ衣食住乃作り方も知らあま  
 ち穀乃肉とそす鮮とて喰ふてそ羽や皮とそ海  
 ちそ身はほとひ洞窟やそもの葉の根なるものとほりて



居れば人も熱同くありてぬありて居れば依て神  
 農畜畜たる人の聖人をもち居て世を治るれば世の  
 三徳のたまふて世の利用と厚生とのふとまきしに  
 して世を治るれば世を治るて衣食住のありては  
 免く難くまきし世の内の住む人の人となりまきし  
 しては右を利用と厚生とのふとのふて人民おのづ  
 かばくれば飽まずと食し候て世の内のあき  
 居る人はぬきてもはる人倫のたふしめきまきし  
 堯舜の時よありてはたて正徳のまきし候て海

舟水一之堯舜より後のいよく衣食住のふとま  
 くらり世治りて作りまきも天下の民次第は巧者よ  
 成れば夏の世より以後利用と厚生とのぬく  
 政のまきし及まきし候ては唯人倫のまきし  
 とおきして正徳の治る方とて天下國家の肝要の  
 政事なればぬ孔子のまきし堯舜より以後周の  
 するはるる正徳の治る方とのみおとせおれ利用  
 厚生なることば勢のありまきし孝悌忠信仁義の  
 まきし世のまきし候て孔子のまきし樊須が穀



聖業の作り方を学べんと請ふれば小人が家からと  
 叱られもこれがあるおれは周より後の世の学問を  
 何を孔子の教と定規といふ事を作らば史記の  
 にも天子諸侯より申國の六藝と謂ふとの皆天子  
 に折中をもつた漢の世より天子の人文学は於て  
 上下ともに皆孔子の教とて規矩として載せしめ  
 知つた也

流流

同じ曰ふ時世と志学同く古学の朱子学のときを維く

流流とたがて佛法乃宗名争ひの根なる沙汰もまこと  
 修せむとせむりふ皆孔子の教と定規と致さしむ作ら  
 ざるは流流乃る也とていふは海よりなる水  
 善て回らばして善つより邪なり劍の鋒より邪なり  
 槍の衝より邪なり此の如く亦くこれなるの如  
 して毎く此形とてまじく流流の如くまじく学問も  
 孔子の教と定規といふ孝悌忠信仁義禮樂といふ  
 國家と治家の如くまじく作らるる古来より知恵乃  
 ちくねくねの善を見識遠くして目の附るは同一



かきあすにさへくれば方とまの作よりて流  
 の名目が来しゆまとは佛法は釋の教として  
 定規といふすべし作はも昔よりめし記和尙  
 乃見儀同のさあより八宗十宗乃定流をれ  
 そのうもしは是を既孔子の山没後子夏子張曾子  
 等のさし門人の教方あしく少くはく了等の遠の  
 作はよおんくを後聖人のた漸く表く戦國の時より  
 孟子と荀子とが後く世を起り孔子の教と稱揚して  
 天下の儒術と唱へ作はるも孟子の性善と孟子の  
 性悪と説きこのの見識をれよお遠なるゆふ作てまより  
 儒道と学ぬよの七一節は漢の時はし程の学問の  
 争ひありしゆまの宋の比るがいはく学者の強動せ  
 るゆふんどうたか

同て曰時人々世といふ古学よりいふの流をえりや  
 言て曰古学よりいふの作は漢魏乃比の文に此程解  
 の書よりて学む作と古学と名づけけし書經漢の孔  
 安國より人乃注といふや尚書と用ひ詩經漢の毛萇と  
 といふ人の作とては後漢の鄭玄より人乃箋とて附毛詩



といふと用ひ易の魏の王弼といふ人の注は晋の韓康伯と  
 中人乃注と云是一人と用ひ春秋の左氏傳は依て晋の  
 杜預といふ人の注と用ひ或は公羊傳穀梁傳といふ人も  
 漢の注之禮記の鄭玄の注と用ひ孝經孔安國の傳といふ人も  
 孝經と用ひ論語魏の何晏といふ人が著せし論語集解と  
 用ひといふ漢魏といふ古の書物と好むは漢と世の中あり  
 古学といふ作らざる  
 同て曰く古学といふ聖人の道といふ解さすといふは  
 作らざる也

言て曰く右ややく漢魏の比は學者といふは種々此見識乃  
 遠いといふは古学といふも一同といふはたまたまといふは  
 これも漢の時代の學者といふは皆多く陰陽といふといふも  
 多岐なりと本火去金水乃といふは仁義禮智信のありといふ  
 事とてまゝと世の中ありといふは相生お克るといふ理を  
 考へるも漢書のあり志といふに及く作らざるも又を後まゝ  
 記誦詞章の学といふ作らざるも書籍と漢文にて詩賦  
 文章といふ作らざるも學者といふは種々時高といふは  
 肉中も孔安國といふ人と孔子より十二代目の孔子孫といふて



け人乃学回と格別なり格なるはれり  
同て曰朱子学と申すは流を以て作也

答て曰朱子学と申すは宋乃程子朱子の流を以て朱子の作也  
小學と曰書の集注と曰詩経朱子の集注  
書經朱子の易子蔡元沈の集注と申す易の程子の傳朱子の  
の卒義と申す春秋の程子の易子胡安國と申す人の作也  
胡氏傳と申す禮記の陳皓と申す人の集注と申す  
朱子の近思錄語類語録又通鑑綱目などを讀むるは  
これども朱子学と申すは近來又程子の流流を以て作也

右の書物の申すは又取捨の遠の作りのよし

同て曰朱子学と申すは道と説き作ていふは  
作りのよし

答て曰程子と朱子も少くも皆遠の処に在りて  
同一教へ方と申し作りのよし一辨の理学と申すは天理  
人欲と申すは学問の本と申し之を説き方ハ元來人乃  
天より受得るは処の本性の聖人も亦た是るべき仁義の  
明るる理と具へ居るは今日人間の欲心は教りて  
皆を心と爲して居居るは人欲乃私と取去て



天理の本性なき論のゆかりとしてそまを建てて教へるの  
 うしろ思ふは是の宋の時分佛法流行して彼の佛法を  
 断惑澄理といふものと世界の人々皆こゝろなく佛ふ  
 ぬべきまの佛性の理と具く居るも煩悩の業惑よ  
 おぼれを迷ひ居作はる煩悩の惑と断捨して佛性  
 の理と悟るべきものと教へ作て天の人の面白きもの  
 多くいふ佛法の理は伏して作て我聖人の道をも  
 有の乃理あるべきものとて目附き作るものと  
 存しおれらるる天理人教とて言は聖人の格言は凡ん

中さす唯禮記乃樂記の篇を凡の作はりよんされど宋初の  
 学問も日馬温公陸象山明の王陽明など一流の身儀よ  
 りたりて程朱の風と遠い作す  
 同て曰仁齋学もこの作すい流ありや  
 言て曰京師の人伊藤源佐名維損と号と仁齋とせり  
 人の学流よりたりて朱子学の四書と名目と用ひむ唯  
 論語と孟子との二書とて用ひ編次古義孟子古義  
 と名付けし別二書の理とて他意經書とばり次り  
 致し中庸を暉大學定本なりとも源佐の著述あり



作はるも大なること信用しす大なる作はるまの論を古義  
とすと学問の神とす作てす何何とす嫌なく坊々坊々  
々々々々作

同て曰を仁齊乃学子といふる見識すといふや  
作とのまや

言て曰彼の宋儒の天理人欲乃説は古乃学問  
何あとも知る所とすづく性理の沙汰とる陰  
却とす人懐の上とす孝悌忠信仁義とるま  
るもの細事どもを論語孟子の文義と解く

作はるも性理乃説と云はるよりとて集録は  
遠のくも人々をさすは他け人と孟子の書とは  
論語乃詮解なりとんらてま家の辞は孔子の語  
乃鄒魯のとすもこの世れどもけ学流は日月の如  
と先とててあ作もて書生の風とて然く  
中仁齊乃嗣子伊原深哉名は長流号と東涯と  
せし人の按厚の学者よとたててさめし著述も  
とたててけ人よりと家の学風と然く世の中は  
作はるも



同て曰<sup>そらひ</sup>從<sup>そらひ</sup>律<sup>そらひ</sup>字<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>い<sup>そらひ</sup>ふ<sup>そらひ</sup>の<sup>そらひ</sup>流<sup>そらひ</sup>を<sup>そらひ</sup>い<sup>そらひ</sup>ふ<sup>そらひ</sup>也<sup>そらひ</sup>。  
 嘗て曰<sup>そらひ</sup>東<sup>そらひ</sup>都<sup>そらひ</sup>の<sup>そらひ</sup>人<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>い<sup>そらひ</sup>ふ<sup>そらひ</sup>の<sup>そらひ</sup>流<sup>そらひ</sup>を<sup>そらひ</sup>い<sup>そらひ</sup>ふ<sup>そらひ</sup>也<sup>そらひ</sup>。  
 姓<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>物<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>書<sup>そらひ</sup>し<sup>そらひ</sup>号<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>律<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>せ<sup>そらひ</sup>し<sup>そらひ</sup>人<sup>そらひ</sup>の<sup>そらひ</sup>流<sup>そらひ</sup>を<sup>そらひ</sup>い<sup>そらひ</sup>ふ<sup>そらひ</sup>也<sup>そらひ</sup>。  
 け<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>宋<sup>そらひ</sup>字<sup>そらひ</sup>の<sup>そらひ</sup>性<sup>そらひ</sup>理<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>思<sup>そらひ</sup>ひ<sup>そらひ</sup>む<sup>そらひ</sup>書<sup>そらひ</sup>る<sup>そらひ</sup>も<sup>そらひ</sup>り<sup>そらひ</sup>各<sup>そらひ</sup>目<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>ば  
 用<sup>そらひ</sup>ひ<sup>そらひ</sup>し<sup>そらひ</sup>ま<sup>そらひ</sup>ず<sup>そらひ</sup>唯<sup>そらひ</sup>書<sup>そらひ</sup>籍<sup>そらひ</sup>を<sup>そらひ</sup>何<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>い<sup>そらひ</sup>ふ<sup>そらひ</sup>博<sup>そらひ</sup>覧<sup>そらひ</sup>を<sup>そらひ</sup>特<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>い<sup>そらひ</sup>ふ<sup>そらひ</sup>。  
 幼<sup>そらひ</sup>学<sup>そらひ</sup>の<sup>そらひ</sup>法<sup>そらひ</sup>点<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>の<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>漢<sup>そらひ</sup>な<sup>そらひ</sup>り<sup>そらひ</sup>し<sup>そらひ</sup>て<sup>そらひ</sup>明<sup>そらひ</sup>朝<sup>そらひ</sup>の<sup>そらひ</sup>李<sup>そらひ</sup>子<sup>そらひ</sup>錦<sup>そらひ</sup>王<sup>そらひ</sup>元<sup>そらひ</sup>貞<sup>そらひ</sup>  
 どの<sup>そらひ</sup>の<sup>そらひ</sup>風<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>美<sup>そらひ</sup>の<sup>そらひ</sup>古<sup>そらひ</sup>文<sup>そらひ</sup>律<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>稱<sup>そらひ</sup>し<sup>そらひ</sup>て<sup>そらひ</sup>書<sup>そらひ</sup>生<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>利<sup>そらひ</sup>は<sup>そらひ</sup>江<sup>そらひ</sup>之<sup>そらひ</sup>作<sup>そらひ</sup>  
 け<sup>そらひ</sup>人<sup>そらひ</sup>の<sup>そらひ</sup>著<sup>そらひ</sup>述<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>論<sup>そらひ</sup>語<sup>そらひ</sup>微<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>の<sup>そらひ</sup>た<sup>そらひ</sup>る<sup>そらひ</sup>も<sup>そらひ</sup>編<sup>そらひ</sup>語<sup>そらひ</sup>を<sup>そらひ</sup>註<sup>そらひ</sup>の<sup>そらひ</sup>注<sup>そらひ</sup>解<sup>そらひ</sup>  
 とい<sup>そらひ</sup>ぬ<sup>そらひ</sup>く<sup>そらひ</sup>古<sup>そらひ</sup>今<sup>そらひ</sup>諸<sup>そらひ</sup>説<sup>そらひ</sup>の<sup>そらひ</sup>お<sup>そらひ</sup>違<sup>そらひ</sup>ひ<sup>そらひ</sup>を<sup>そらひ</sup>し<sup>そらひ</sup>評<sup>そらひ</sup>し<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>評<sup>そらひ</sup>判<sup>そらひ</sup>し<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>

自ら乃<sup>そらひ</sup>了<sup>そらひ</sup>言<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>述<sup>そらひ</sup>之<sup>そらひ</sup>作<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>の<sup>そらひ</sup>え<sup>そらひ</sup>又<sup>そらひ</sup>辨<sup>そらひ</sup>道<sup>そらひ</sup>辨<sup>そらひ</sup>名<sup>そらひ</sup>及<sup>そらひ</sup>の<sup>そらひ</sup>学<sup>そらひ</sup>則<sup>そらひ</sup>を<sup>そらひ</sup>  
 して<sup>そらひ</sup>を<sup>そらひ</sup>見<sup>そらひ</sup>識<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>何<sup>そらひ</sup>し<sup>そらひ</sup>の<sup>そらひ</sup>著<sup>そらひ</sup>述<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>た<sup>そらひ</sup>る<sup>そらひ</sup>從<sup>そらひ</sup>律<sup>そらひ</sup>字<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>学<sup>そらひ</sup>流<sup>そらひ</sup>  
 の<sup>そらひ</sup>れ<sup>そらひ</sup>作<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>右<sup>そらひ</sup>の<sup>そらひ</sup>論<sup>そらひ</sup>語<sup>そらひ</sup>微<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>辨<sup>そらひ</sup>道<sup>そらひ</sup>辨<sup>そらひ</sup>名<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>よ<sup>そらひ</sup>た<sup>そらひ</sup>る<sup>そらひ</sup>又<sup>そらひ</sup>中<sup>そらひ</sup>庸<sup>そらひ</sup>解<sup>そらひ</sup>  
 大<sup>そらひ</sup>学<sup>そらひ</sup>解<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>の<sup>そらひ</sup>も<sup>そらひ</sup>た<sup>そらひ</sup>る<sup>そらひ</sup>も<sup>そらひ</sup>大<sup>そらひ</sup>学<sup>そらひ</sup>中<sup>そらひ</sup>庸<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>法<sup>そらひ</sup>用<sup>そらひ</sup>の<sup>そらひ</sup>し<sup>そらひ</sup>  
 作<sup>そらひ</sup>ら<sup>そらひ</sup>れ<sup>そらひ</sup>た<sup>そらひ</sup>る<sup>そらひ</sup>も<sup>そらひ</sup>外<sup>そらひ</sup>に<sup>そらひ</sup>な<sup>そらひ</sup>ら<sup>そらひ</sup>ず<sup>そらひ</sup>た<sup>そらひ</sup>る<sup>そらひ</sup>も<sup>そらひ</sup>著<sup>そらひ</sup>述<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>た<sup>そらひ</sup>る<sup>そらひ</sup>也<sup>そらひ</sup>。  
 同<sup>そらひ</sup>て<sup>そらひ</sup>曰<sup>そらひ</sup>し<sup>そらひ</sup>從<sup>そらひ</sup>律<sup>そらひ</sup>の<sup>そらひ</sup>見<sup>そらひ</sup>識<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>い<sup>そらひ</sup>ふ<sup>そらひ</sup>の<sup>そらひ</sup>流<sup>そらひ</sup>を<sup>そらひ</sup>い<sup>そらひ</sup>ふ<sup>そらひ</sup>也<sup>そらひ</sup>。  
 嘗<sup>そらひ</sup>て<sup>そらひ</sup>曰<sup>そらひ</sup>け<sup>そらひ</sup>人<sup>そらひ</sup>乃<sup>そらひ</sup>見<sup>そらひ</sup>識<sup>そらひ</sup>の<sup>そらひ</sup>道<sup>そらひ</sup>天<sup>そらひ</sup>理<sup>そらひ</sup>自<sup>そらひ</sup>然<sup>そらひ</sup>の<sup>そらひ</sup>如<sup>そらひ</sup>も<sup>そらひ</sup>あ<sup>そらひ</sup>る<sup>そらひ</sup>也<sup>そらひ</sup>。  
 何<sup>そらひ</sup>の<sup>そらひ</sup>道<sup>そらひ</sup>を<sup>そらひ</sup>何<sup>そらひ</sup>の<sup>そらひ</sup>制<sup>そらひ</sup>作<sup>そらひ</sup>せ<sup>そらひ</sup>た<sup>そらひ</sup>る<sup>そらひ</sup>も<sup>そらひ</sup>の<sup>そらひ</sup>如<sup>そらひ</sup>も<sup>そらひ</sup>禮<sup>そらひ</sup>樂<sup>そらひ</sup>と<sup>そらひ</sup>



邦の人心の性におのづから別れておるを言ふも意を  
 定むるものよりあつたは生養の是なる所也とあつた  
 故に言つるはうめをきせられぬ所性と要し一書にの  
 けきなりしんひ又仁といふ人のことなりて民と安んず  
 の徳ありて平人の身は仁といふことなりしんひの  
 門人多き中やも服於此處の号と南郭といふ人を古  
 語古傳の号と春其也といふ人といふを存の言し一学者  
 なるし一又いふ人乃身を識るお遠のしんひを事ハや  
 經學と稱しして古文孝經の校年論語古訓孔子家語

増進するんとせしめて終る乃著述多くしたる南郭ハわ  
 詩文と稱しして穀一と詩文集ハた作詩も是と指別  
 乃著述ハた作詩も是と指別  
 おんて南郭風ハ經書と解さる古語といふ集記あり  
 定むる身を識るなりしんひを事ハや  
 詩文と稱しして穀一と詩文集ハた作詩も是と指別  
 ハ詩文章とは好むやうす經學と稱し一經濟の事  
 心掛け足ぬれども只今世の中孝經と家語との説く  
 以ては概ね此作ハ今くは春其の世話ゆゑなりしんひ



是に實を聖門に於て莫大なる功をこしたる  
 同て曰存ありやもほぐ學問の流流をたまたむるを  
 言て曰存ありやせやく孔子の聖門人方をこしてんく  
 今得たされぬ今く同くもあつて後孟子より  
 荀子よりして又性善性惡の論をこすの如遠く  
 作て又より漢魏のはる學者もく此身識くの遠の  
 依てまき學風皆同くあつて後唐宋のはる學者  
 も又かく學風の異なれども作はる學問の流流と  
 分け作時と數なりともあつても今世とていふ

別は身識とあへてあつて又小まきくせし學者も  
 して作りて皆流何果の流もくまきり彼の武藝の  
 得あり此場とて形と作り何流誰流とて追くふ  
 流義のまきく如く根を流とのうし存くをたう又今  
 の世よりしたる身識のもちもんくあつて一家と成まはる  
 意をたうて流著述もたうまきりけり異く  
 して一流の學者自とて居る者のまきくまきり作  
 くれまきり思ふてたうて作し

家學



同て曰流は自ら此學問の流なり也

是を曰拙者も學問の流は自ら此學問の流なり也

流の良し悪しは自ら此學問の流なり也

同て曰流の良し悪しは自ら此學問の流なり也

是を曰漢魏の注解し學を信り古學とすべし集注

し學を信り朱子學とすべし又仁齋祖徳など

學問と信り信り仁齋學も祖徳學もすべし

古人の注解と用ひ拙者が新觀の説とも建て信り

拙者が流とすべし信り信り編は古の注解に依て

誰の學風と信り用ひ流とすべし信り信り又古人の

と自ら新しく之を改せしむるは信り信り

流流は自ら此學問の流なり也

同て曰之編は何の注解も信り信り誰の學風と信り

信り信り信り信り信り信り信り信り信り信り

信り

是を曰世の中此學流と名するは定めて此學流乃

是流と明ふして古流と信り信り信り信り信り

信り信り信り信り信り信り信り信り信り信り



朱子の説乃是にして卯の字は非なるを辨く古の  
るは作らん者なるの思はれ者ら自らの了言と  
以てを流流の是非と分るるを朱子の作はれとす  
を經の傳りとしりて何事も一流と信ぜざる能は  
ずはゆえし

問て曰れれども自らの講釋なるは流るるは非の  
流と用ひれれ也

答て曰何きの流と云ふやとなく唯經傳のなりの傳  
聖人の教と規範として解きしるやと

問て曰學問は何きの流義すも皆聖人の教と規範と  
いするのみは作らず也

答て曰勿論何事も聖人の教と規範といふべきは  
ある無く作はるもされども古より知る思ふく流るる  
聖人の傳言よんは流るると自らに其見識として別  
言と述べてさめれば教の方とすまはく作はるも  
どの思はれ流るるの何きの教が是とせんも辨  
作はるもく聖人の傳言の傳りよん傳るる何  
あはれはとなく作はるる



曰て曰はせむし知乃聖人乃由言はんが家教の方  
中ハ世もくまじいを家するは作也

昔て曰はら事多きこと作はるもそ大なるものと  
作はるも子人の性ハ本善なる物作はるも又皆そ  
仁義の良くと取放て吾れば學問してそ放んと取  
收はるもそと曰言曰場のそ又と教へ又荀子の人の性ハ  
本惡なる物なれば性のみよにきて言ふとす人ハ人ハ  
あは家ゆへふ聖人乃禮義とてそ性と操むする  
なれば學問せざればけい家するとて初學のそ又汝

朽人まうして漢魏のめく學者の了る言はるくそ  
宋儒の道と天理自然のなるそ性言の説とそ後  
近來從律學といは道ハ聖人制作のたして性ハ人  
別くの物なりといふを印釋と説く學者ありそ  
吾そ天理と求め作はるは皆つあは理ハあつて人ハ  
性も聖人の由言ふあは明ふ性言も性惡もそ  
やうそ又天理自然の道も聖人制作のたして性ハ  
すもそけ教のよは作てそそけ知ハ理を修しそ  
学ハ修するもそ聖經のたが家教ハ實の知ハ人ハ



ん許ぢくなくはれ作は拙者うも存にすし聖人  
乃此言のぬりともさうらすは相違すいふぬい  
なく作ん

因て曰此は聖人の此言のぬりともせし時此言は  
此の如の道は自然の物や制此をせしもの作や  
性此言よりや悪は作やいふん得らんや

言て曰是等の如の拙者たるて著述のせし聖道  
得門聖道辨物聖道合語とて此の書はあはく徳の  
作は右の書といつての<sup>さ</sup>喻しやあはく

因て曰此今の自らの志を以て經書と解し作す  
何きの經書とすゆなく唯聖人の此言のぬりとも  
作すも定まりし經釋のたなく作す初学の者も  
中又はよりもしぬりぬりしやいふやとなく

言て曰拙者うも下りし初学の者の為は拙者  
いふや孝經六記論語家語の本はたすし先  
等の書といひてなすことし古語も集注もその  
經解の如も去嫌ひなく讀む作て何事とせしや  
聖人乃此言乃此理を察し作らんやの程と考へ合を



取捨よく作る字句の極はなるを成るとなる

歸趣

同て白分のなる林葉の道はまをれど同てさるの月波  
凡流の如く中流の武藝の如くはまをれど同て何れも  
初め入る所の流流はまをれど同て何れも  
理の如くはまをれど同て何れも  
海は流流の如くはまをれど同て何れも  
入るも中流の如くはまをれど同て何れも  
昔て同て流流の如くはまをれど同て何れも

る所の月波はまをれど同て何れも  
凡流の如くはまをれど同て何れも  
初め入る所の流流はまをれど同て何れも  
理の如くはまをれど同て何れも  
海は流流の如くはまをれど同て何れも  
入るも中流の如くはまをれど同て何れも  
昔て同て流流の如くはまをれど同て何れも



皇言 全 三十一 理

遠くも或は自然の及なりとんふ人ありて  
制作乃及なりとんふ人もある或は道に歸人  
あるとんふ人もあるよりて知れぬの流流  
古学と好む人漢魏の学者の身は  
その宋学と好む人程子朱子れつけ  
と好む人よりて朱子の仁徳徳律  
好む人よりて仁徳徳律乃及ぬ  
と好む人れば皆を学流なり  
同一道を同一根元とんふ人あり

同じ月とては月といふは  
道といふは思ふ人が実なる  
づ

善て日月を言ふは一天は深  
賞するはよりよる  
んがたりふ同じ思ふ  
その論はあふべし  
人が実なる道と念得せし人  
思ふ同じ思はし

皇言 全 三十一 理



作はるは命なりやくせしむるを人なる言の海なりとのみ  
 らるをそと忠孝と本として天下國家と治家の道  
 なりと知るはよりよしそとていふ物として聖人の出言  
 せもんごさるる理とさめく後を没くは皆をさの論は  
 あふ事しと存し是聖人の出言親ははくそ孝は  
 りのふらんとて君ははくは忠は忠の道とあり見あつて  
 情とありあんとて官長ははくは順の道とあり妻子  
 奴婢と理ありあんとて官職のふは後せは治の道とあり  
 中へ聖經の定まりて教をていすも及まず荀子の書よ

學は式は成りおまじて止むるありて聖人のたふ孝悌忠  
 信仁義のふらなりあふは作はるは學問とたふそ孝悌忠信  
 仁義のふら方と増く古の聖賢の言はつて物とほらぬ  
 のふ作て是と日用ははくはふら外は又小深き理と求むき  
 りふらたはくは又學問と風流すするふらあふは技藝と  
 せふらふらあふは作と後世のふら遠く人へ學問と技藝  
 の根ふらはらてそと平生らふらふらは捨て唯書籍と能  
 讀む詩文章とそと取らるるは作のふら某はは自ら  
 せし學問と成りそと世のふらふらとせれと學問のふら掛あふ



者として貴吏せむるに遠くもつと作れどもくハ  
 海程なんどの辨は色し明す作も詩文章ハりも作も  
 学への処の聖人乃道と信して以て身と性の家と舟ハ  
 國と治るふと誓とす依るのなは学問のハ掛りて用之  
 而して人なりと尸し又そと人教るべきの書籍と漢教千  
 年乃古々と若く辨古ハ蘇秦張儀と歎き詩ハ李白  
 杜甫よりも務り文ハ韓退之柳子厚よりも巧なりと中  
 ともそ平生の以て海に舟ハ家の治るも誓とす忠  
 孝仁義の道ハ志磨とそめなりは学問乃ハ掛ありとハ

中ハ世の用とて人ハ世にれが依る孔子乃由孔子  
 と徳行と言語と政事と文學との四科を以てその  
 作らざるも然れども何せとそ孔子は從て學子と起ハる  
 孝悌忠信の徳行を志して徳行政を依はるを以て  
 初より徳行と卯也と只言語政ののれと學子也ハ  
 作らざるも然れども其修けす依肉は其をそ人の生養の  
 身を起る可と成せざるなりと四科ハわけ作らざるも  
 四科ともに皆徳行の修けの中ハ成れざるなりと作ら  
 ざる乃道の爲す依起は起るなりハ何れも一なるは



今日より學問の志ありて拙者へお供せられり  
 右乃西元悟めてつ學を仕振ると存し之  
 寛政六年寅の春阿久人乃同に隨て書し  
 海くふ家せのみ

彫之富園大徳門

雄風館著書目録

大峯 冢田氏塾

冢註孝經

一冊

論語羣疑考

十冊

冢註六記

六冊

孟子斷

四冊

學記 中庸記

坊記 緇衣記

荀子斷

四冊

冢註論語

五冊

聖道得門

一冊

冢註家語

五冊

聖道辨物

二冊

冢註尚書

六冊

聖道合語

二冊

冢註詩經

五冊

國語增註

六冊

冢註孔叢子

三冊

冢註老子

二冊



著書  
目錄  
現址

解愠 一冊 孝經和字訓 一冊

皇極和談 一冊 入官第一義 一冊

滑川談 一冊 發字便覽 一冊

[Redacted]

櫻邑閑語 先人遺書 六冊

旭嶺先生遺稿 同 五冊

[Redacted]



